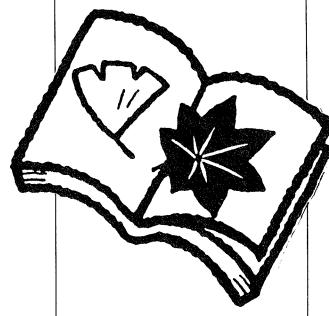


市史の 広場

甲府に住んで——雜感——

小池 真奈美



私が初めて「甲府」という地名を知ったのは、北海道に住んでいた小学二年生の頃で、姉の文通相手が韋崎の人で、どうの採れる甲府の近くだということを教えられた時でした。その頃の私にとってはとても遠い所すぎて、その甲府に住むことになろうとは思いもよらないことでした。その後東北の郡山、東京へと移り、甲府については特別知る機会もなく過ごしていましたが、縁あって三年前に嫁いできました。そんな私にとっての甲府の印象を少しのべてみたいと思います。

甲府に降り立って初めて目にしたのは、整備された駅前から広々とした道がまっすぐ伸び、その道に沿ってたくさんのビルが立ち並ぶ光景です。トンネルをいくつも抜けたあとに登場するであろうと想像していた街とはずいぶん違って、その大きさと都

会的な様子に驚きを感じました。そんな光景とは対照的に、ぐるりと周囲を山々に囲まれ、四季ごとに変わりゆく自然の美しさを朝夕にがめることのできる毎日。なんと言っても日本一の富士山の姿は絶景であり、新幹線の中からしか見たことのなかつ

たその姿が我が家の窓から見ることができる甲府は、私にとってとても魅力的な所です。景色のすばらしさは昼間だけではありません。甲府の夜景の美しさも必見のものです。山々に守られた美しい宝石という感じで、貴金属産業の街甲府にふさわしいものだと思います。

その山々にこだまするよう、甲府では一年中時期を問わず頻繁に花火が上がります。どうもお祭りの日ばかりに限らずといったようですから、甲府の人達は賑やかで、ぱっと派手やかなことが好きなのでしょう

か。「えひす講・節分・七夕」といった商店街の売り出し等もとても盛んで、華やかに飾りつけられた街へ大勢の人々がくり出しますに、この街の活気と、人々の生活力溢れるエネルギーを感じます。

新しい土地に行き、そこに早く馴染むのは、できるだけ早くその土地の方言をマスターすることです。甲府の方言については何の知識もなく、東京に近いところなのだからほとんどの標準語なのだろうと考えていた私にとって、初めて聞く甲府の言葉はとても新鮮でした。東北弁のような方言の代表的なものとちがい、甲州弁は全国的には

あまり知られていないのではないでしょ
うか。一昨年の「武田信玄」の放送を見て知つ
た人も多いことと思います。私はまず特徴
のある言葉やアクセントを見つけて真似し
てみるとから始めました。「やせつたい、
やぶせつたい、しゃらうるさい、だつちも
ない、おまんら、わけーし……」等々、威
勢のいい言葉が次々と耳に入ります。

語気の強さと歯切れのよさ、そして独特の
アクセントとまくしたてるようなテンポが
合わさって、けんか腰のようにさえ思え、
こんなことを言うとしかられるかもしま
せんが、初めの頃は、甲府の人はとてもき
つくてけんか早く、私のような「わたりも
ん」にとつてはつきあいにくい人達ではな
いかなという心配をしたものです。でもそ
れぞれの言葉の使い方やニュアンスがわかつ
てきて、実際に自分でも使ってみると、甲
州弁はとても味わいのある言葉であること
に気がつきます。そしておつきあいをして
みると、甲府の人達は、親切でめんどうみ
の良いあたたかい人が多いように思われま
す。

近頃では私も、「いいじやん・いいさよ」
といったような言葉が無意識のうちに出て
る。

ようになつてきました。そんな時、私も少
しは甲府の人になつてきたかなとうれしい
思いがします。あと何年かたつてふと気づ
くとすっかり甲州弁になつてゐるかもしれ
ません。そんな日が来るのをとても楽しみ
にしています。

(市史編さん事務局)

山梨の民話にあらわれる動物

宮澤 富美恵

狩猟採集経済の時代には人間にとって動物
は重大な関心の対象であり、日常生活の
中で話題にのぼることも多かつたかもしれません。
現代に至るまでの長い時間、動物と
人間は様々な関係を結んできた。民話(昔
話)の中にはその関わりの一端を示すもの
が多く含まれている。山梨に伝わる民話の
中には、山国とあつてか動物の登場するもの
も多いという。

ここでは、一九二二年から一九八〇年の
間に直接採集、公表された昔話資料を収載
した『日本昔話通観』第一二巻「山梨・長
野」(稻田浩二・小沢俊夫編、内容は「む

かし語り」「笑い話」「動物昔話」の三つ
に分けられている)から、「動物昔話」に
特にこだわらずに、登場する動物達の個性
(といつてもそれは語り手||人間の動物観
が強く反映したものだが)をいくつかみて
みたい。

狼(山犬)

牧畜民にとっては凶惡な獣の代表である
狼も、日本では恐怖の対象であると同時に
害獸から田畠を護る(カミ)、「大口真神」
として祀られ、関東・中部を中心に広がる
三峯講では狼が眷属として現在でも信仰の
対象になつてゐる。秋山村に伝わる「古屋